

報道写真家 大瀬二郎氏 写真展 & 講演会

日時

写真展

12月7日(月)～12月18日(金)
12月21日(月)～12月24日(木)

場所 大谷大学響流館1階展示ギャラリー

日時

講演

12月15日(火) 13時～14時30分

場所 大谷大学響流館3階メディアホール

大瀬二郎氏はミズーリ大学ジャーナリズム学部報道写真学科を卒業後、アメリカの新聞社を経て、現在フリーの報道写真家として世界各地で起こる数々の事象にカメラを向け世界中に発信されています。2007年：the Pictures of the Year International (POYI)で Award of Excellenceを受賞。Time、Newsweek、朝日新聞ほか多数のメディアに写真を寄稿。



お問い合わせ

大谷大学社会学科 滝口直子

dkbmp804@kyoto.zaq.ne.jp

企画：大谷大学 文学部社会学科

写真家の言葉より



コンゴの熱帯雨林で豪雨に打たれ、
サハラ砂漠の砂あらしに晒され、
イエメンの海岸に打ち寄せる波に揉まれ、
ヨルダンの病室で大やけどの苦痛に耐え続ける人々。

世界で過去5年間だけで15の紛争が勃・再発し、暴力や地球温暖化による食糧危機によって家を追われた人々の数は近年急増している。

この人々の強制移動は近年拡大し、UNHCR（国連難民高等弁務官）によると、2014年で難民の数は5950万人と過去最多。さらにその半数は子供。2013年は5120万人で、一年間に増えた人数としては最多。急増は2011年に始まったシリア紛争が要因だが、この数は世界中で122人に一人が難民になったことを意味する。

だがこの実情は、私達にとって理解し難い遠い国での出来事に過ぎないのだろうか？

グローバル化が急速に進み既に定着し始めた今、紛争地から掘り出される希少金属や宝石、石油や熱帯堅木などが、携帯電話やファッションアクセサリー、家具や車や火力発電などに使われ、私たちの消費社会の日常生活に入り込み溶け込んでいる。必ずと言っていいほど日本の車や工業製品に使われている鉱物、それは紛争地で掘り出されたかもしれない。私たちの平穏な社会には関係が無いと知らぬふりをしていても、自らが直接関わっているのは、否定できない事実。私たちは結果的に天然資源の搾取が目的のNeocolonialist（新植民地者）ではないのか？

同じく生を受け、親を愛し子も愛す人々に、道徳的な責任が私達にはあるのではないのか？ 平和に安全に暮らす私たちは上級クラス、彼らは下級クラスと、世界を一つの社会として見てみると、私たちは差別社会に生きているのではないのだろうか？

こういった疑問を問いかける機会を 私の写真が 生み出すことができることを願って、今まで写真を撮ってきました。

さらに、過酷な環境に置かれ将来もままたらぬまま、歯を食いしばりささやかに生きている人たちの、残酷さと向き合いながらも、輝く美しさも、私の写真を通して見つけていただければ幸いです。

